Massachusetts General Hospital 留学記

岐阜大学医学部附属病院　放射線科
野田佳史

（1） はじめに

岐阜大学医学部附属病院放射線科の野田佳史と申します。IVR 医に憧れ 2012 年に入局した後は、IVR はもちろんのこと、画像診断や臨床研究に従事し、2019 年から海外での研究留学の機会をいただきました。学生や研修医、また若手医師の皆さんの中で、臨床研究と言われてピンとくる人は少ないのではないでしょうか。私も学生、研修医の頃はとにかくカテーテル検査・治療ができれば楽しい、研究の「け」の字も知らない状態でした。しかし、上司に恵まれ、入局と同時に大学院進学を進言されたこともあり、早い段階で研究の道に足を踏み入れることとなりました。今回、留学記を記す機会をいただきましたので、私の経験を紹介させていただくことにします。

（2） 臨床研究の楽しさ

「お前は IVR なんてすぐ飽きるぞ。お前を救ってくれるのは研究だ。」

IVR をやりたくて医学科 5 年生から目指してきた放射線科医にようやくなることができた 2012 年 4 月のこと、前述の上司が私に向けて発した言葉です。放射線科では毎年 4 月に日本医学放射線学会総会が開かれます。学会期間中、経緯は忘れましたがホテルでその上司と 2 人で話す機会がありました。そこで言われたのがこの言葉です。これから思う存分 IVR ができるとワクワクしていた私は、すぐ飽きると言われ、この言葉を理解することができませんでした。しかし、入局と同時に進学した大学院を卒業する頃になって、この言葉が妙に頭をよぎるのです。お陰様で IVR 医として人の命を救うことができるようになっていたこの頃、次の目標を定める時期になっていたのだと思います。IVR で日本一を目指す？しかし、何をもって日本一なのか…。

大学院の 4 年間、筆頭著者として 10 編の論文を執筆し、その成果が PubMed に掲載されるのを見たり、よりインパクトファクターの高いジャーナルに採択されたりすると、研究に喜びを感じるようになりました。決して楽な道のりではありませんが、頑張った成果が数字として見えることは私にとって次へのモチベーションになっています。また、研究を継続することで、学会に参加することも多くなりますし、そこで広がる人脈が何よりの財産であると実感します。このようにして、IVR を含めた臨床もやりつつではありますが、研究に主軸を置くようになっていったのです。まさに上司の言うとおりでした。

（3） いざ、海外留学へ

留学への意識が高まったのは現教授であります、松尾政之教授が就任した頃でしょうか。海外留学を勧めて頂き、常々言われていたのが「行くならハーバードかスタンフォード」。しかし、いざ留学しようにも当然ハーバードやスタンフォードにツテはありませ

ん。そもそも、この数年の間に海外留学を経験している医局員がおりませんでしたので、留学先探しをどうしたらいいかと悩んでいました。そこで、まずは留学から帰ってきたばかりの金沢大学の先生にお話を伺うことにしました。その先生からは Mayo Clinic、Massachusetts General Hospital (MGH)、Johns Hopkins あたりであれば打診できると言って頂き、晴れて教授から言われていたハーバードの病院、MGH に留学が決まったのです。他大学の先生との繋がりがなければ MGH に留学することはできなかったと思いますし、研究を頑張ってきた甲斐があったと感じる瞬間でもありました。

（4） 留学生活

医局の手厚いサポートのおかげもあり、2019 年 4 月から 1 年間の留学生活がスタートしました。ボストンにある MGH は、岐阜大学出身であれば医学科 1 年で見た「ER 緊急救命室」の原作者であるマイケル・クライトンが実習を行った病院としても有名です（図 1)。この頃までに私の主な研究テーマは「膵臓画像診断」に固まっており、留学中、師事したボスの専門も「膵臓」や「Dual-energy CT」と、まさにベストマッチでした。

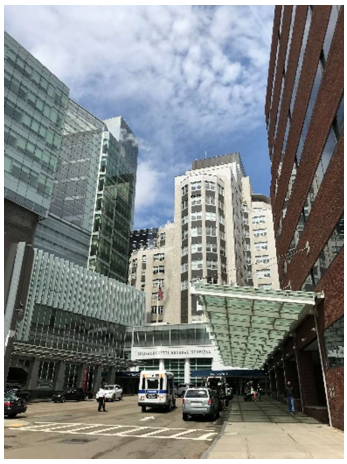

図 1：MGH 本館

例えば、岐阜大学で膵癌の CT について研究をしようと思い立ったとしても、短期間で多くの症例が集まるわけではありません。しかし、MGH では 23 台もの CT 装置を保有しており、症例を集めることは造作もないことです。こんな恵まれた環境に身を置くことはそうあることではないと、留学前からボスに送っておいた study plan をもとにいくつか研究を走らせることに成功しました。基本的にデータベース作成、データ収集、統計解析、論文執筆まで放任主義ですので、自分一人で全てできるベースがないと何もできない環境かと思いますが、データの解釈や draft の edit 等、時間をかけるべきところはとことん付き合ってくれるボスでした。また、blind reader も自ら買って出てくれ、休日であってもデータ収集を手伝ってくれるなど、部下思いであり上司としてのあり方をも考えさせられる人でもありました。留学期間中は臨床業務がないため、一日中研究に没頭できますし、症例も潤沢にありますので、留学中に執筆した論文はこれまでに 4 編 publish することができ、まだこれから投稿する論文も後に控えています。このように研究者にとっては理想的な環境で仕事をすることができました。

また、留学中の楽しみといえば旅行です（図 2)。当直や緊急待機はなく、17 時のカンファレンス終了と同時に帰宅できます。ボスに休みが欲しいと言えば休みを取ることができ（一部の research fellow はなんでボスは Yoshi だけ優遇しているのか、と言っていましたが。。)、家族と過ごす時間が圧倒的に増えました。東海岸を移動する分には時差に悩まされることもないため、常にアクティブに観光することが可能です。帰国してから 1 ヶ月も経っていないにも関わらず、下の子が「最近飛行機乗ってないねぇ。」と言う程、毎月

の様に飛行機に乗っては色々なところに連れて行くことができました。その他、学校では決して習わない表現方法や言葉使い、しきたりや文化等々、現地でしか経験できないことがここでは語り尽くせない程あります。もし次の機会を頂けるのであれば、迷わず「行きたいです」と答えるでしょう。それほど海外留学は魅力的なのです。

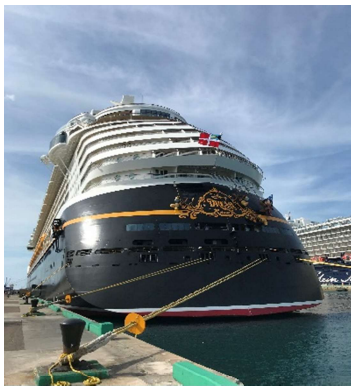

図 2：Disney cruise

（5） さいごに

研究に限らず、その時は今自分が取り組んでいることの意義がわからないこともあるかもしれません。しかし、後から振り返って、あの時頑張ってよかったと思える日がきっと来る気がします。正直、私にとって海外留学はご褒美みたいなものでした。上司に大学院進学を勧められたので入学し、論文を書いてみろと言われたので何編か書いていたその延長に今回の留学があったのです。IVR 医を目指して放射線科の門を叩いた当時の自分が今の自分を到底想像できないように、自分に何が合っているのかなんて簡単にはわからないのかもしれません。ですから、損得勘定抜きにしていろいろなことに挑戦してみて下さい。自分でも知らない可能性に気づかせてくれるかもしれません。

最後に、今回の留学の件で多大なるご支援頂いた先生方、そして快く送り出していただいた医局の先生方に厚く御礼申し上げます。